

<エッセイ> 「日文研」の思い出

著者	伊東 俊太郎
雑誌名	日文研
巻	59
ページ	12-15
発行年	2017-05-21
特集号タイトル	創立三十周年記念特集号
URL	http://doi.org/10.15055/00006678

<エッセイ> 「日文研」の思い出

著者	伊東 俊太郎
雑誌名	日文研
巻	59
ページ	12-15
発行年	2017-05-21
特集号タイトル	創立三十周年記念特集号
URL	http://doi.org/10.15055/00006678

「日文研」の思い出

伊 東 俊太郎

「日文研」創立三〇周年、まことにおめでとう存じます。私が日文研に赴任したのは、平成元年（一九八九年）二月でした。従って創立（一九八七年）後三年目ということになります。二月という半端な月になったのは、前任校東京大学の定年が平成二年の三月（満六〇歳）ということになっていましたが、梅原猛所長（当時）のご意向で、その前に移ってほしいとのことでした。しかし東京大学の大学院過程（科学史・科学基礎論、比較文学・比較文化、西洋古典学担当）のことなどもあり、簡単には離れることができず、やっと定年直前のぎりぎり四ヶ月前になって、転任が可能になったという次第です。

当時はまだ大枝山町の本施設は出来ておらず、何か京都の役所の一部を間借りしているような状態でした。翌年（一九九〇年）には桂坂の主要施設が竣工し、我々は内井昭蔵氏設計の明るい壮麗な建物に引越しました。周囲の自然と調和した何という居心地のよいところだろうと、都会中心で育った私は感嘆しました。その「コモンルーム」には、当時の教授たち、埴原和郎、中西進、山折哲雄、濱口恵俊、飯田経夫らの皆さんが若い研究員と一緒にあって、ワイワイ議論しており、梅原所長もしばしばおいでになり、その輪の中心になっておられました。私も日文研のそんな自由で賑やかな雰囲気が好きで、そこでの語り合いに加わったのは今でも楽しいなつかしい思い出として目の前に浮かび上がってきます。

またこの研究センターの若手（当時）の所員たちのご協力やご援助にも深く感謝します。とくに私の場合、安田喜憲、鈴木貞美、上垣外憲一の三氏のご助力は有難かったです。研究センターでは二回の共同研究（平成二・三年度と平成四・五年度）を主催しましたが、鈴木・安田両氏は共同研究会の幹事役も務めて下さいました。その成果は『日本人の自然観』（河出書房新社、一九九五）と『日本の科学と文明』（同成社、二〇〇〇）として出版されていますが、いま前者の目次だけを掲げると、次の通りです。

伊東俊太郎編『日本人の自然観―縄文から現代科学まで』

序論 循環の世界観―アイヌと沖縄の自然観から

梅原 猛

第一章 縄文

縄文時代の時代区分と自然環境の変動

安田 喜憲

縄文宗教の母神と日本人の自然観

吉田 敦彦

縄文の精神世界をさぐる

小山 修三

第二章 古代

古代人の自然観―その起源について

中西 進

記・紀創世神話における自然―道教的・錬金術的コスモゴニー

荒川 紘

歌の発生と自然

古橋 信孝

野遊び

久野 昭

第三章 中世

中世日本人の自然観―仏教を中心に

山折 哲雄

『新古今集』の自然観

第四章 近世・近代

国学者の自然観

ラフカディオ・ハーンと神道

武道の自然観―阿波研造の場合

近代における日本人の自然観―西洋との比較において

日本近代文学に見る自然観―その変遷の概要

第五章 現代

新自然観としての四次元問題―宮沢賢治『春と修羅』序を中心に

現代科学が日本人の自然観に与えた影響

今西錦司の自然観

湯川秀樹の自然観―中間子論形成における

上垣外憲一

百川 敬仁

平川 祐弘

源 了圓

渡辺 正雄

鈴木 貞美

金子 務

村上陽一郎

柴谷 篤弘

伊東俊太郎

錚錚たる顔触れによる優れた論考が並んでいます。あらためて読んでみると、この研究会における当時の活発で生々とした遣り取りが、今でも快よく思い起されます。まことに日文研における私は仕合わせでありました。私も幾分かは研究所の活動に貢献でき、私自身がそこから多くのものを学び、成長することができました。梅原顧問をはじめとして、既往の研究員・職員の皆様方のご好意に、この機会に篤く御礼申し上げます。

今ではスタッフもすっかり入れ替り、私の居たところご一緒したのは、小松現所長と井上章一教授のお二人ぐらいとなってしまいました。しかし、その後も優れた人材が次々に採用され、

創立三〇周年を迎えた今日、日文研はなお隆々として発展を続けているようです。

そこで最後に一つの提案を終わります。それはこの記念の年に、日文研による「日本文化研究賞」(「研究奨励賞」を含む)を創設したら如何でしょうか。これは世界の日本研究者にとって少なからぬ励みになるでしょうし、また「日文研」のもつ国際的役割の一部も果たすことになるでしょう。是非ご検討をお願いしたいと思います。

(国際日本文化研究センター名誉教授)